

幻の古代道路を追って

池田 誠一

■【4】直線の道跡…中村から露橋へ■

1 見出された古代道路

名古屋の街の中に古代道路の跡が残っているということは、地域の人はなかなか想像ができませんでした。しかし外部の専門家の目から、その意外なものが見つかったのです。それは中村区から昭和区にかけて、併せて6*。に及ぶ「く」の字の道の痕跡です。発見したのは木下良氏(元国学院大教授)です。氏は今、古代道路研究の第一人者とされる人で、平成10年の春日井市でのシンポジウムの記念講演の中でした(文献①、図1、注)。

これまで、この地域の古代東海道ルートについては、様々な議論がありました。しかしその主流とされているのは、津島から萱津、古渡(中区)を通り、東南方向の二村(豊明市)に向うという漠としたものだったといえます。ところが木下氏の指摘は、ほぼその上に具体的な道跡を示したのです。今回はこの木下氏の指摘を紹介し、それが現地でどのような形になっている

かを調べてみたいと思います。

2 直線道路をさがす

(1)木下氏の推理

木下氏は、古代道路が発掘され始めた1970年代から、全国で多くの古代道路跡を発見してきました。名古屋付近の道路跡は、春日井シンポジウムでの講演のため、当地方の古代道路に着目し、調査したのがきっかけだった

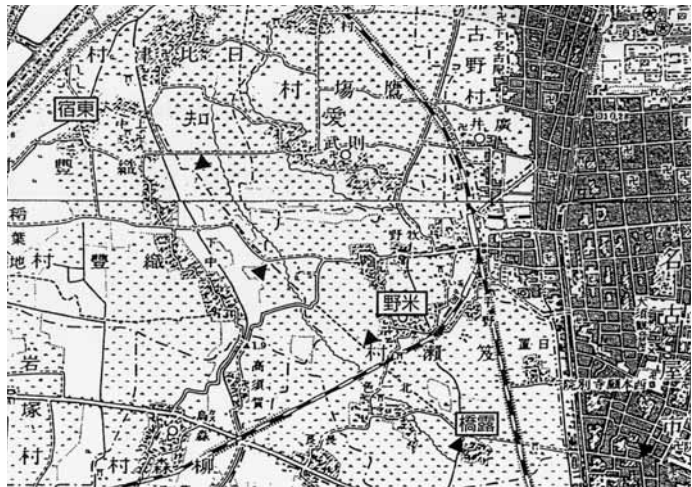


図1 木下氏によって指摘された直線の道(一部)。三角の先を結んだ道になる。(文献②)

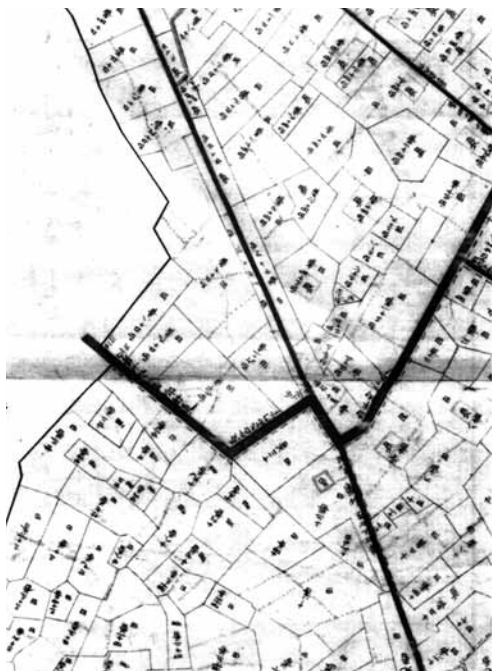


図2 明治17年の地籍図に見られる直線の道と短冊状の土地

と考えられます。

氏は、まず新溝駅の候補になっている古渡付近を、明治24年の5万分の1の地図で確認しました。そしてその後、

(西北側)中村―露橋 約3.5*。

(東南側)露橋―御器所 約2.5*。

の、直線の小道を発見しました。しかし氏はそのみに止まらず、この道を明治17年に徴税のために造られた地籍図で確認したのです。その結果、とくに西北部の米野村の中には、①字の境の線としてその直線道路があり、しかも②それを軸に幅10²/₁₀位の短冊状の土地が長く連なっていることを見出しました(図2)。とくに②のような道幅と考えられる短冊状の地割りの連続は、全国の古代道路跡で多く見られる現象です。このことから、氏はこの道を「古代道路跡の可能性が高い」としたのです。

(2) 鎌倉街道とされた道

ここで指摘された直線道路の西北側は、江戸時代から鎌倉街道と考えられてきた道でもありました。江戸時代後半に書かれた『尾張徇行記』の米野村の項には、

古小栗街道(鎌倉街道)ノ跡八下米野村ノ南

田畝ノ間ニノコレリ、是八露橋村界ナリ…

と、古い道が残っていたことを記しています。

しかし当時はその道跡が、はるか昔の道路の跡だったとまでは思いが及びませんでした。

そして近年までその考えは受け継がれ、多くの識者も、古代道路跡とは気が付かなかったようです。明治の地図は、多くの人が何度も見つめてきた地図です。広幅員、直線という新しい古代道路観があって、初めて発見できたといえるのかもしれませんが。

(3) 今も残る道路跡

ではその旧道の跡は、今どのようになっているのでしょうか。名古屋市内は、戦前戦後の耕地整理や区画整理によって、古い道路や地割が消えてしまいました。中村の付近も同様で、東西と南北に再区画され、とくに斜め方向の道の多くは消えています。

しかし中村と露橋の間には、大正末に中川運河が計画されました。それが斜めに横断したために、交差する街道跡が奇跡的に残ったようです。その地点は、

①九重町：道路の隅切りに。旧道跡で

②月島町：細い小道として。直線上に

③横堀町：山王線の起点に。不要道路で

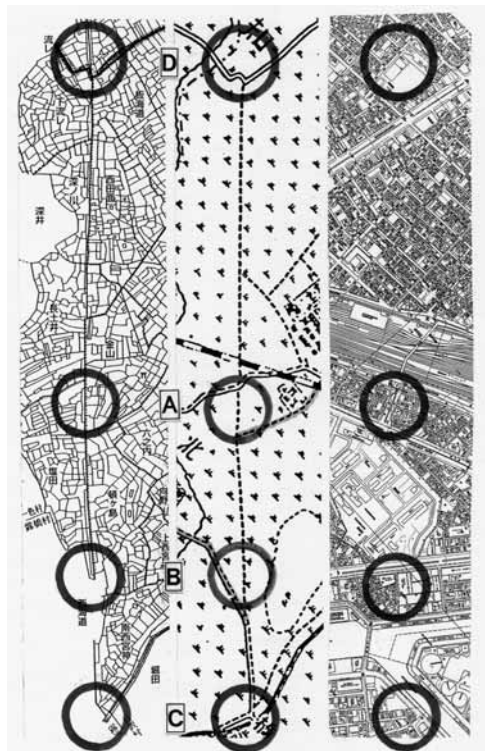


図3 左：地籍図、中：明治の地図、右：現在の地図。Aは九重町、Bは月島町、Cは横堀町。また上のDは柳街道との交点(文献①等)

の3箇所です。そして、この3箇所は見事に直線の旧道上にのっているのです(図3)。

3 紀行 直線道路跡を追って

… 中村から露橋へ …

それでは古代の直線道路跡と想定される道影を追って、中村から露橋へ歩いてみたいと思います。

〈中村から〉

前回の終着点、地下鉄の中村公園駅を出て、広小路につながる幹線道路・太閤通を東に進みます。4つ目の信号交差点を右に入った辺りは直線道路が通っていた所になります。もちろんなんの跡もありません。この付近は戦前の中村の中心部ともいえる所です。東北には中村の遊廓があり、またすぐ南の郵便局の所には「名古屋花壇」という大きな遊園地があり、賑やかな場所でした。

南に進み、2つ目の信号交差点を左に曲ります。通りは千成通といい、この付近に多い太閤さんの関連地名です。しばらく行くと右側に黄金中学があります。ここも直線道路の通過地点になります。街道は西北から東南へと斜めに進んでいるので迂回して進みます。環状線の信号を渡って右に曲り、次の信号を



直線道路の通る大宮町付近。この先右に名古屋花壇があった



黄金中学。この付近を直線道路は斜めに通っていた

左に曲ります。この一帯は明治の地図では田圃が広がります。次の信号を右に曲り、少し進むと鉄道線路に突き当たります。直線道路は先ほどの黄金中学からまっすぐこの付近に進んでいることになります。すのすぐ手前の道を左に入ると名古屋城築城時の石工たちがまつた金山神社があり、その先に線路の横断橋への階段があります。

階段を上ると、左側に名古屋駅前の高層ビル群が米野の古い町並と対比をみせています。線路には最近歩道専用になった古いトラス橋の向野橋が架かっています。明治19年、京都の山陰線のために造られた、当時はわが国でも有数の橋で、昭和5年ここに移設されました。この橋は鉄道車両基地を跨いでいるためマニアには人気の場所になっています。橋を渡りきって振り返ると、鈴鹿山脈が見えます。古代道路は目印になる山などを目指して進んだといいますが、この道は伊吹山とは少し方向がずれているようです。



米野の住宅地の向うに名古屋駅前のビル群が見える



近代化遺産の向野橋。この下に車両基地がある

〈露橋へ〉

正面の歩道橋を下ります。注意してみると階段は下の道路と方向が違ってきます。これは階段が旧道の方角でできているためで、この付近が旧道跡の残る①九重町の道になります。ただ旧道跡を今でも示しているのは、手

①九重町の道跡。右手前と左向うの隅切が変っている



前右側とその向こうの幹線道路に出る所の左側の2つの隅切になってしまいました。

幹線道路を渡り左に、すぐ右の斜めの通りを東に向かいます。商店街を進み、少し行って信号を渡り右に曲ります。幹線道路を進み、その三本目、左に入る工場脇の細い道が②月島町の道になります。わずか100mほどの道ですが、あきらかに旧道上にある道になります。道を抜けると道路の向こう側に中川運河があります。右に見える小栗橋を渡ります。中世の鎌倉街道が小栗街道と呼ばれた名残です。運河建設前は、旧道は橋のやや上流側を通っていたという記録があり、これまで追ってきた旧道の位置とも整合します。

②月島町の旧道跡。工場脇の小道。正面に金山の高層ビルが見える



小栗橋から上流側。この付近を旧道が通っていた

橋を渡ると露橋で、信号を越えた向こうに有名な鈴木バイオリンの工場があります。次



横堀町の旧道跡。影になったところに旧道があった

の③横堀町の道に行くため、その次の道を左に突き当りまで行きます。この角は右に行くと、すぐ広がって幹線道路の山王線になります。その左側に一見民地のような路地状の土地があります。ここが古図や線形から考えると直線道路の一部にあたり、それも山王線の方向とは少し曲っていることから、直線道路の「く」の字の曲り角だと考えられるのです。

右に進むと山王線です。道は徐々に広くなります。まっすぐ東に、少し行って新幹線等の線路を潜ると、その向こうに名鉄本線の山王駅があります。

4 交差する街道の跡

江戸時代、名古屋城下の納屋橋から西南に、中川区の烏森に向かう柳街道と呼ばれた道がありました。この道が中村区内で直線道路と交差します。面白いのはこの交差部が特徴あるW型をしているため、明治の地籍図でもその位置が特定できるのです。そこは、柳街道の前後の位置を現在と比較すると、ほぼ黄金中学校の校庭と体育館の所と推定できます。この付近の地籍図には道路幅と考えられる短冊状の土地も連なっており、古代道路跡の確率の高い地区といえるのです。

古代道路は通過が目的で造られているため、沿線には史跡を残しませんでした。あるのは道路—それも溝の跡—なのです。掘ってみたい。なんとか溝を掘り当ててはできないか。私の古代道路への妄想はつづきます。

(注)この章の古代道路は、一昨年の鎌倉街道でも紹介しました。

〈主な参考文献〉

①『第6回春日井シンポジウム資料集』
(1996、同実行委員会)

②森・門脇編『旅の古代史・道・橋・関をめぐって』
(1999、大巧社)